

あそぶ・まなぶ・語る

周防大島町総合体育館陸上競技場 / 日本ハワイ移民資料館
八幡生涯学習のむら / 宮本常一記念館

第52号
2025年11月

3月21日は弘法大師の縁日。各地で大師堂へお参りする人や巡拝をする人が見られました。周防大島でも各地区の札所を巡り歩くお遍路さんは春の風物詩でした。お遍路さんといえば四国が知られていますが、なぜ周防大島でも札所巡りが行われたのでしょうか。

四国八十八ヶ所巡り（四国遍路）は四国



【写真1】第57番帯石山（日前）平成20年3月11日

写真展開催



八幡生涯学習のむら

の八十八ヶ所の霊場を歩く巡礼の旅で、弘法大師空海によって開かれたといわれます。江戸時代には『四国遍礼道指南』『四国遍礼霊場記（しくへんろれいじょうき）』といった案内書が出版され、多くの人が四国遍路に旅立ちました。四国巡礼を行う人は沿道の人から食べ物や宿の「接待」を受けることができました。「接待」を行った人は遍路を行うのと同じご利益をいただけると思われていたのです。とはいえ、四国遍路は全長362里（約1440km）と距離が長く徒歩だと50日はかかる旅で、地方から気軽に旅立てるものではありません。そこで、四国の八十八ヶ所（本四国）になぞらえた霊場が地方にも設けられるようになり、瀬戸内海にも霊場が開かれた島があり、島の四国霊場の巡礼を島四国と呼びました。周防大島の霊場もその一つです。

大島八十八ヶ所は、明治22（1889）年大島地区日見の西



【写真3】第66番神浦大師堂
お接待はヒジキ入りのおにぎり。
平成19年 旧3月21日



【写真2】第75番観音寺（屋代吉兼）カマドでの調理。ご飯は2斗1升も炊いた。炊き上がったご飯はおにぎりにする。平成19年頃。

長寺の佐々木純円によって「周南八十八ヶ所霊場」として開設されました。大正9（1902）年「大島新四国八十八ヶ所霊場」と改称され、昭和13（1938）年大島霊場開設50周年記念大法会が行われた後は「大島八十八ヶ所霊場」と呼ぶようになりました。大島霊場の全行程は約38里（約163km）で、5～6日で巡拝することができました。玖珂郡・熊毛郡の参拝者が多く、明治末から大正時代にはたいへんにぎわい、菅笠白衣の群れが田舎道を続いたといえます。島に住む人々にとっても島内各所を巡る旅は改めて自分たちが住む島を知る機会だったのではないのでしょうか。

この度の企画展では、周防大島の島遍路とそれを支えた人々を紹介します。（古賀瑞枝）

【期間】令和8年1月14日（水）～2月15日（日）

※月曜ほか休館日のぞく

※1月下旬に講演会を予定しています

【場所】八幡生涯学習のむら

【観覧料】無料

【問合せ】八幡生涯学習のむら

0820・72・2601

歩くだけで体も心も元気に！

ポールを使った
新しいウォーキング習慣

高い有酸素運動効果に注目！

健康づくりのために毎月第4木曜日に「いきいき健康ウォーキング」を開催しています。ノルディックウォーキングは、フィンランドで生まれたポールを使ったウォーキング。スキーストックのようなポールを持って歩くことで、自然に腕を振り、背中や肩などの上半身の筋肉も一緒に使えるのが特徴です。

●普通のウォーキングより消費カロリーは約20%アップ！

●膝や腰の負担を軽減し、

姿勢改善にも効果的！

●全身の筋肉を使うため、

血流や代謝も活発に！

「運動不足を解消したい」「体力をつけたい」そんな方にぴったりの運動です。インストラクターが丁寧に指導しますので、初心者の方も安心。日常生活で取り入れられる体操や歩き方のアドバイスも受けられます。健康づくりの第一歩に、ぜひお気軽にご参加ください！皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

【日時】 毎月第4木曜日

10時～11時30分

【場所】 周防大島町陸上競技場

※雨天時は総合体育館

アリーナ（室内履きを

ご持参ください）

【対象】 どなたでも参加できます。

【参加費】 無料（ポールレンタルも

無料・予約不要）

【携行品】 タオル・飲み物・帽子など

【服装】 歩きやすいスタイルで

お越しください。

宮本常一記念館

◆令和7年度後半スケジュール◆

★企画展「周防大島の農業」

宮本常一が昭和30年代に撮影した写真によって島における稲作と畑作

の展開を紹介します。併せて、島で使われていた民具等を音声ガイドによって解説します。（※）



（※）QRコードを読み込めるスマートフォンが必要です。

【会期】 令和7年11月1日（土）～

令和8年1月25日（日）

※水曜日ほか休館日のぞく

【会場】 宮本常一記念館 展示室

【入場】 通常の料金で観覧できます

（大人300円、子ども150円）

★公開講座「宮本常一と農業」



宮本常一が幼少時に島で体験した農業、戦中や戦後に全国各地で行った農業技術と農家経営の視察・指導

等を紹介し、宮本の「篤農家」としての側面を浮き彫りにします。

【日時】 令和7年12月6日（土）

13時半～15時

【講師】 板垣優河（宮本常一記念館学芸員）

【会場】 東和総合センター 大ホール

【定員】 60名（予約不要・先着順）

【入場】 無料

★旅学講座「山から見た宮本常一」



海や島から山へと視点を移して、宮本常一が語った山の民俗

に眼を凝らしします。

【日時】 令和8年1月31日（土）

14時半～16時

【講師】 赤坂憲雄（民俗学者）

【会場】 東和総合センター 大ホール

【定員】 60名（予約不要・先着順）

【入場】 無料

※当日、宮本常一記念館は休館日です。予めご了承ください。

【問合せ】 宮本常一記念館

0820・78・2514

はら情報新最



宮本常一記念館
ホームページ

資料館の

展示品から

ハワイへ渡った

人々の生活を

感じる



日本ハワイ移民資料館



右の写真はパーコレーターといってコーヒーを抽出する道具です。

昭和20年代生まれの私には、子どもの頃に、父がコーヒーをいれる時の音と香りの思い出があります。まさしく展示品と同じ電気パーコレーターで、水とコーヒーをいれ、スイッチを入れると、沸騰するお湯がわき出てきてコーヒーをドリップします。ポコポコと音がして、そのわき出る様子が天辺のガラス越しに見えます。

一緒に思い出すが、『ヒルス珈琲の赤い缶』がそばにあったことです。もう一つは『MJB珈琲緑の缶』もありました。

前者は、1878年創業でサンフランシスコ発祥。1900年代から赤

い缶のデザインが定着しています。日本国内でもヒルスコーヒーはちよつと贅沢な味という印象があります。後者は1899年サンフランシスコで創業されたメーカーで、ハワイや日系移民社会で広く普及して日本にも入ってきました。現在これらのコーヒー缶は手に入りにくく貴重なものとなっています。

コーヒーはハワイ移民の「日常とアメリカ文化の象徴」とも言えます。そして多数の出稼ぎや移民を輩出した周防大島は、その文化の日本へ流入する基点となっているようです。

ハワイから戻ってきた移民たちのことを周防大島では「ハワイ帰り」と呼びました。私の記憶では、「ハワイ帰り」の隣のおばあさんたちは、英語混じりで会話をしていました。



発音もパンのことをブレードなどと言っていました。

昭和20年代はまだまだ洋食の朝食は定着していないころですが、帰国した人々は、朝食にパンとコーヒーの生活を始めていました。また、ハワイ

生まれで日本で教育を受け戦前ハワイに渡って日本語学校の教師をして退職後帰国したという方が、平成11年に日本ハワイ移民資料館開館当時にマスコミのインタビューに「朝は、



パンとオートミールを飲む」という話でした。また他には「朝は、コーヒーとワッフルやホットケーキを食べていた」と話してくださった方もいます。

コーヒーに関しては、現周南市で古くから喫茶店を営んでおられる方が当館にこられた際に「昭和の末期にお店で使うコーヒー缶を大島へ買いに来ていましたよ！」とお話をされていたことを思い出しました。

パーコレーターをはじめとしたコーヒー文化の歴史を考えるのも日米交流の歴史を見る一つの視点となります。当館のコーヒー展示について充実させたいと考えています。皆さんのコーヒーに関する思い出や、所持している古い道具などの情報を当館にお寄せいただければ幸いです。

(井倉清水)



一枚の古写真



左は宮本常一が昭和34年6月15日に周防大島の長崎で撮影した写真です。周防大島では一般的に、山で作っている田をヤマダ（山田）、海岸付近の平地で作っている

田をオキダ（沖田）と呼んでいました。写真の田はヤマダになりま

す。田植えは水の冷たいヤマダからオキダへ向かって順に進められました。ヤマダで作った米は水温や水質の関

係からか、オキダで作った米よりも美味し

いといわれ、法事などで人が集まる時にはわざわざヤマダの米を炊いて提供する

こともありました。写真ではサオトメ（早乙女）と呼ばれる女性が田に入って苗を植えています。田は隣近所や親戚同士で植

え合いました。これは一種の労働力の交換であり、テマガエ（手間替え）



と呼んでいました。1人が半日で植えられる面積は平均3畝とされ、半日で田植えが終わるように調整しました。例えば、1反の田を植えるなら、3〜4人の人手を確保する必要がありました。

不定形な田では、まず縦に基準線としてシンヅナ（芯綱）と呼ぶ縄を

1本張り、それと直交するようにミズナワ（水縄）を張ります。

ミズナワには7〜8寸の間隔で赤紐を結んだ

り、赤色塗料を付けた

りし、それらを目印にして苗を植えていきま

した。

写真では、ほとん

ど

の女性が苗束を持つて

立っています。右端

の女性だけ持つてお

らず、後退しようとして

います。写真

のような田植えの場合、ミズナワで

指定した列を植え終わり、全員が後

退するのを待つてからミズナワを張

り直す必要があります。そのため、1人が遅れると、全体の作業が滞ることになります。田の両端でミズナ

ワを張るのは、気のしつかりした女性でした。気が緩んだ者や手の遅い者がいると、両端の女性が目で合図して同時に縄をしゃくり上げました。するとミズナワに付いている泥がその女性の顔にはね上がりま

す。単に泥をはね上げるだけでなく、お

しゃべりの多い人には口の中に泥が

入るように上手く調整し、ミズナワ

をしゃくすることもありました。

総じて、周防大島の農業は山がち

な地形と相対的な水不足を背景に、

切実な自給自足的手段として、また

外部経済につながるための現金獲得

手段として、柔軟にかたちを変えな

がら行われてきました。そこには

様々な技術伝承や体験を生み出す素

地があったと思います。

私は、本紙2頁でお知らせした企

画展と講座を開催するにあたり、周

防大島の各地を訪ね、伝統的な農業

について貴重なお話をたくさん聞か

せていただきました。今回の取り組みを通して、周防大島の農業につい

て理解を深めていただくとともに、「令和の米騒動」ともいわれる現代の食料問題を考えるきっかけが得られれば幸いです。

（板垣優河）

新刊紹介

宮本常一

農漁村
採訪録 28



このたび、宮本常一記念館では『宮

本常一農漁村採訪録28 昭和10年周

防大島調査ノート』を刊行しました。

本巻で収録したのは、宮本が昭和10

年8月に作成した調査ノートです。

この頃宮本は大阪で小学校の教員を

していました。夏季休暇を利用して周防大島に帰省し、浮島や沖家室

島などで漁業習俗を調べました。当

時浮島ではイワシ網、沖家室島では

一本釣りが盛んでしたが、これら漁

業は現在も行われています。私は、

宮本の調査ノートを分析するととも

に、現在に立脚して聞き取りを進める

ことで、ここ100年ほどの時間ス

ケールの中で島の生産活動や生活の

変遷を明らかにすることができると

考えています。そこで、本巻を編集

するにあたり、改めて現地で調査を

行い、ノートに見える民俗の背景や

言葉の意味などを教えてもらいま

した。その成果も今後冊子にまとめて

報告する予定です。

（板垣優河）

【販売】1冊1000円